

Alert 44号

〔通巻 426 号〕
2020年
2月4日発行

第2期・反天皇制運動連絡会

野次馬日誌 * 9 集会の真相 * 10 学習会報告 * 11 反天日誌 * 12 集会情報 * 12

マスコミじかけの天皇制 * 43 (壇憲天皇制・象徴天皇教國家) 批判 その8 ●
（重田リベラリスト） 南原繁の一 一九五六年 「紀元節」 演述を読む — 天野恵一 * 8

太田昌国のみたび夢は夜ひらく (116)
● ひたひたと社会に浸透する (いかがわしさ) — 太田昌国 * 7

書評 ● 福富節男 「僕がデモ屋になつたわけ」について — 有馬保彦 * 6

状況批評 ● 文化・伝統のレイシズム — 小倉利丸 * 4

今月の Alert ● ヘイトと権威主義のパンデミックこそ警戒し対抗しよう * 2
反天ジャーナル ● — よこやまみちふみ、ななこ、橙 * 3

湯浅欽史さんが去年11月23日に84年の生涯を終えたという連絡は、かつての小さな読書会「技術論研」のメンバーから来た。その集まりが、私と湯浅さんの酒をまじえた出会いの場であった。その会場は、反天連のスタートの空間でもあった「高円寺ボックス」。会のネーミングはいつだったか忘れてしまったが、戸坂潤をとりまとめて読み続けていた70年代後半、早大の理工系の大学院生らとのほんの数人の読書会からそれは始まった。戸坂ら「唯物論研究会」の「科学技術論」と新左翼にも強い影響を与えた武谷三男らの技術論とを比較検討し、熱心に論議していた。都立大の造反教官だった、「たまごの会」で活動していた湯浅さんらのそこへの参加は、「理論」研究の場からリアルな科学・技術論の検証の場にそこを転換させる契機となった。反原発・反コンピュータのテキストをあれこれ読み漁り、討論する時間が何年も続いた。

長く没交渉になっていた湯浅さんと再会させたのは(3・11)原発震災であった。私は病身を引きずって反原発運動にも突入し、その渦の中で原子力資料情報室を手伝っていた、すでに心臓手術後の彼と、また交流した。今度は酒ナシでゆっくりと。私がかんでいる「再稼働阻止ネットワーク」のニュースの制作を彼は死の直前まで積極的に手伝ってくれていた。雑務をとてつもなく律儀に、楽しげにこなす人であった。原理的エコロジストなのに、タバコと車(それもスピード運転)が大好きといった、奇妙に分裂的人生をニコニコ生きた不思議な人でもあった。

ただ〈あの時代〉から「全共闘」の問い合わせるべく〈思想と行動〉の人生を生き、土木工学の専門研究はやめ、専門論文はまったく書かなかった人であったこと。私はこの点を忘れるわけにはいかない。

僕は、もう少しガンバレそうです。湯浅さん。(天野恵一)



250円

- 定期購読をお願いします (送料共年間4000円)
- 郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町1-21-7 静和ビル2A 淡路町事務所気付 落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://www.ten-no.net/mail:hanten@ten-no.net>
- 以前の情報はこちら▶ <http://hanten-2.blogspot.jp/>

今月の
Alert

ヘイトと権威主義のパンデミックこそ 警戒し対抗しよう



これまで感染症が世界的に蔓延していった経過には、単純な交易にとどまらない植民地などの経済政策が大きな役割を果たしたことが知られている。その罪はいまだ償われておらず重大である。しかし、病気を媒介するのが細菌やウイルスなどであれば、少しばかりの公衆衛生や治療環境の整備と個々人の日常的な対応によって、その危険性のほとんどは抑え込むことができるというものが現在の知見だろう。もちろん、それすらも叶わないことが少しばらはあるというのは、疾病における歴史的社会的不正なのだ。

これらなかなか達成が及ばない現実を前提としながらも、それをさらに「悪性」のものとしていくことは許されない。短期間の国際的な「緊張緩和」が過ぎ去ると同時に反動として憎悪と恐怖の政治がやはり国際的に巻き起こされ、その繰り返しどとともに自由や平等といった価値が毀損させられていいくというのは、これまでにも何度もあったことだが、その頻度が増しているのは、やはり「情報化」と人の移動が独占資本と独裁国家の下で大々的に展開されていれる、今世紀の二〇年のことだろう。いま、中国湖北省武漢市での「新型肺炎」のウイルス感染の発生を前に、きわめて醜悪な社会的状況がつぶれられている。

それは例えは、感染者にとどまらない中國人全般に対する世界的な「嫌悪」として

これまで感染症が世界的に蔓延していった経過には、単純な交易にとどまらない植民地などの経済政策が大きな役割を果たしたことなどが知られている。その罪はいまだ償われておらず重大である。しかし、病気を媒介するのが細菌やウイルスなどであれば、少しばかりの公衆衛生や治療環境の整備と個々人の日常的な対応によって、その危険性のほとんどは抑え込むことができるといいうのが現在の知見だろう。もちろん、それすらも叶わないことが少しばらはあるというのは、疾病における歴史的社会的不正なのだ。

朝鮮人たちに対して限りなく拡大するヘイトクライムとなっている。現在それは、人の移動ばかりでなく中国に関連する多数のもの「入国禁止」を求めるゼノフォビアの言説として繰り広げられつつある。ウイルスによつてもたらされる疾患や症状よりも、インターネットごとにSNSによって広げられ流通する「嫌悪」や「恐怖」のほうが、ウイルスよりも「変異」が早く、そのもたらすものは、すぐに発現しないとしても個人や社会の中に深く沈潜して、おぞましい結果を生みだしていくのではないか。

インナーサークルに利権をもたらし、少しでもその利害に背くものには、脅迫や懲罰的権力の発動を平然とする安倍の支配体制が、搖りぎながらも、その飛沫によりむしろ腐敗をまき散らすかつて続くなが、こうした社会情勢を利用してしようとする策動もまたなされている。典型的には、徳仁の

すでに現れている。中国などの経済的政治的影響力の増大に対する「警戒」の言説は、これまでもあつたが、アメリカのトランプ政権のめちゃくちゃというしかない「自國優先」と他国を敵視する政策によりさらに拡大した。「敵国」をつくり出すことにより権力者への求心力をもたらそうとする政策は、独裁体制において顕著だが、これが世界的に拡がっている。国内的には、それは他者に対するヘイトとなり、とりわけ日本国家の中では、在日コリアンや中国・韓国・朝鮮人たちに対して限りなく拡大するヘイトクライムとなっている。現在それは、人の移動ばかりでなく中国に関連する多数のもの「入国禁止」を求めるゼノフォビアの言説として繰り広げられつつある。ウイルスによつてもたらされる疾患や症状よりも、インターネットごとにSNSによって広げられ流通する「嫌悪」や「恐怖」のほうが、ウイルスよりも「変異」が早く、そのもたらすものは、すぐに発現しないとしても個人や社会の中に深く沈潜して、おぞましい結果を生みだしていくのではないか。

私たちには現在、一月一日の「紀元節」には「代替わり」と露出した天皇神話を撃つ! 2・11反『紀元節』行動」を、さらに、徳仁の誕生日である二月二三日には、「これまでの代替わり過程に力を尽くしてきた「おわてんねつと」を締めくくる「天皇のない民主主義を語ろう」討論集会を開催しようとして準備中だ。

それぞれの集会の開催の主体こそ違え、めざすところは同じものをさしている。恥知らずで野放団な政治や資本の暴力と、それがにぴったりと寄り添う天皇制の権威主義的国家は、「他者」を閉じ込め、批判者から自由を奪いながら形成されていく。これらを許さない取り組みを、ほんの少しづつでも拡大し影響をもたらしていく。あらためて集会への参加と開かれた議論を呼びかけたい。

(蝙蝠)

英洞中の地を歩くところと

年の瀬に、イスラエルおよびパレスチナを訪問する機会を得た。

イスラエルとパレスチナについては、つい先日、トランプ米大統領による「二國家共存」を掲げる中東和平案が発表されたが、これまで、この二国家間の歴史的経緯や関係がよく理解できていなかつた。イスラエル＝ユダヤ人とパレスチナ＝アラブ人という二つの陣営に分かれて民族的・宗教的に対立している、といったような通俗的な理解の範疇に留まっていた。しかし、現地での限られたスタディツアーナカで、その経緯や背景があはらげながらも見えてきた。

では、現在にいたる「イスラエル＝パレスチナ問題」の起点はどうあるだらうか。諸説あるが、そのひとつが、一九一七年のバルフォア宣言（イギリスがユダヤ人にパレスチナ国家建設を認めた宣言）を起點とする考え方である。詳説はできないが、つまり、ヨーロッパの中東における植民地主義の帰結として生み出された問題とする見方である。渦中の地に立てば植民といふ行為が過去のものではなく、現在進行形であるという重い現実を突き付けられる。そういうば、「中東」という地域概念も一九世紀以降にイギリスなどがインド以西を植民地化するにあたって考へ出した概念であった。

（よ）やま みちふみ

「一緒」にするな！

田糞鼻糞「愛子天皇待望」論

なかなか行動に参加できず、「今の今」の「ころ、ボーッ」とついていたテレビで「オリンピックまで半年」イベント、全国一一四のテレビ局で一斉に同じ番組が始まつて、ちょっと静かになつたところで「○※×△◆はんたい～！」と聞こえた。うん？ 確かに誰か言つたよね？ 聞き慣れた雰囲気の声。やつてるやつてる！ すげー！ 全国でテレビついてるといふではかなりこの場面を見てるつてわけでしょ。やつたじゃん！

しかしこの番組、かなり気持ち悪かった。

「一緒にやるう2020」という「ソニセプト」などが、

「例えは、一緒に世界をきれいにしてみよう。心

も綺麗に、街も綺麗に」。みんなが敬意を払い合う

社会も、「ミのないきれいな街も、一緒に、夢

じゃない」とHPにある。冗談か？ 不都合なもの

に蓋をするのが大得意なこの国のやり方そのも

のだ。野宿者や汚染土の詰まったフレコンバッグ

を隠して「ミのないきれいな街」にするつもり

なのだ。そんなことに加担したくはない。「一緒

」を強制しないでくれ。前から同調圧力に弱い国民

性からすると、いうのはかなりやばい。この

狂騒の後には多くの人たちがそのツケを、いろいろな形で払わせられるのだ。それも「一緒に」つてか？ 勘弁してよ～

週刊誌やインターネット上では、愛子天皇待望論がポツポツ出まわつてゐる。「ヨウシツジの会」は、愛子を次代天皇にゆるための「皇室典範」改訂を求める署名を呼びかけたりもして、うね。「今のままでは皇位繼承者も皇族もいなくなるぞ」というのは、まあみんな考えていること。だから天皇制維持派の多くは「女性・女系天皇、女性宮家を」となるわけだけど、「ヨウシツジの会」は「愛子天皇を」にぶつ飛んでしまう。なぜ秋篠宮や悠仁をぶつ飛ばして愛子なのかといえば、現天皇の「直系」だから、というのだ。

なるほど、「男系か女系か」よりも「男系か直系か」なのだな。「血筋」が大事、「直系」が大事、

でもって「男系男子」にこだわつて、いふとすべて

を失う。となれば「男系」を外して「直系」の「長

子主義」がいいと。え？ フエミっぽい？ 嘘で

予どもの頃はよく言われた。勉強しなさい、学

歴は生きるために必要なんだと。だけどこの社

会で大事なことは、男子である」とと、どんな家

系の何番目に生まれたがなんだつて、天皇一家は

ずっと教えてきたのだった。で、この国の住民は

みんなよく学んでいるつてわけ……。親の説教よ

りもウンザリな話だす。

（橙）

状況 批評

思想・状況・批評

文化・伝統のレイシズム 小倉利丸

● 生前退位「お言葉」の再読

何度も議論され、批判もされてきた明仁の生前退位表明だが、あえてやつづいて下記の文言をとりあげてみたい。

「即位以来、私は国事行為を行うと共に、日本国憲法下で象徴と位置づけられた天皇の望ましい在り方を、日々模索しつつ過ごしてきました。伝統の継承者として、これを守り続ける責任に深く思いを致し、更に日々新たになる日本と世界の中には、日本の皇室が、いかに伝統を現代に生かし、いきいきとして社会に内在し、人々の期待に応えていくかを考えつつ、今日に至っています。」

明仁が「国事行為を行うと共に」と述べてはいることに注目したい。彼は天皇に国事行為以外に天皇の重要な役割があることを明言した。そのあとに「日本国憲法下で象徴と位置づけられた天皇の望ましい在り方を、日々模索」と続ける。憲法では象徴天皇の国事行為は、内閣が責任をもって助言して行なわれる国事行為であるはずだ。しかし、明仁はそのようなものとして天皇の象徴的行為を考えていなかった。憲法の枠に縛られた国事行為の外にも、天皇が主体となる象徴的行為があることを明言した。これは、象徴としての天皇の行為は、憲法によって制約しえない領域を含み、憲法の外部にあって憲法を超越する、とも解釈できる言ひ回しだ。戦後民主主義を体現する天皇であるかのように解釈されてきたが、少なくとも、晩年の彼は天皇の象徴的行為の憲法超越性を自覚していたのではないか。ここでいう憲法を超越するといつても、それは、政治的な権力が法を超えるという意味ではなく文化や伝統に内在する象徴権力の超越性を含意している。

「伝統の継承者」を天皇に与えられた役割だと述べては見逃せない。天皇が想定している聞き手はむっぱら日本国民であると同時に、その圧倒的多数を占める（構築されたものとしての）エスニック集団としての「日本人」

である。「日本文化」に属さない「文化」や「伝統」は天皇にとって「守り続ける責任」を有さない。そして、「日本の皇室が、いかに伝統を現代に生かし」という皇室を主語とする表現は、日本文化総体を念頭に置きつつ、その中心に皇室の文化を据えた表現だ。ここには文化のヒエラルキーも含意されている。しかも、こうした伝統の継承者として「いきいきとして社会に内在」する」とを使命にするという。社会に内在した皇室は、当然のこととして、日本の文化や日本に固有の価値を伝統としつつ日本社会にこれを内在化させることを通じて「継承」を実現する主体になる。主権在民の理念ではない。ここに戦後憲法の本音が透けてみえる。

天皇が日本国民統合の象徴でありながら、同時に「伝統の継承者」でもあるところとは、日本が天皇や皇室の伝統を共有する单一民族から構成されるところの虚構を肯定した排除の言説、あるいは日本文化を最上位に置いて諸々の文化をその下位に位置づける差別の言説でもある。これを国民統合の象徴の役割としての天皇が担うということは、統治機構のあり方として、差別や排除が構造化されることを意味している。天皇が「伝統」を口にするところとは、国民統合をいわゆる「日本文化」を共有する「民族」や社会集団に限定し、それ以外の社会集団の存在を排除するか差別するところ構図を統治機構のなかに持ち込むことを意味している。「伝統の継承者」とは、異なる文化的排除の表明であって、レイシズムの言説なのだ。

この戦後の皇室の発言や振舞いに体現されている文化や伝統をめぐるレイシズムは、戦前戦後を通じて憲法が国民統合を、そもそも法によって規制するとのできない特異な宗教的な主体である天皇の象徴機能を与えた結果である。この意味で問題の根源は、戦前であれ戦後であれ憲法そのものにある。

● 慶・あばい

現在の天皇、徳仁も皇太子時代に「伝統」や「文化」を次のように用いている。

「京都府は、我が国の政治や文化の中心地として、千年を超える歴史を有し、海を越えて渡来する文化を取り入れながら、日本文化の基本を形成してきた「このふるさと」と言える地域です。また、長い歴史を通じて、常に時代の変化に対応し、今なお、伝統文化の中心であるとともに、新しい文化を創造し続けています。（中略）京都では、「いじろを整える～文化発心～」という大変奥深いテーマを掲げて取り組んでいました。日本文化と日本人の精神性を見直し、次の世代に継承するため、大にしたい日本の「いじろ」のメッセージを募集し発信するなど、多彩な取組が進められています（二〇一一年国民文化祭、京都・宮内庁ウエップより）」

「海を越えて渡来する文化を取り入れながら」という文言は、文化的な多様性を肯定するかのようにみせながら、むしろ「日本文化」が様々な文化を同化させてきた優位的な位置にあることを評価している。右にあるように何度も「こころ」という言葉を使い「日本人の精神性」という表現すら用いている。皇室が「日本人の精神性」に言及したことはほとんどない。宮内庁のウエップでみる限りこの一箇所だけだ。「物」を介した文化から人間の感性や心情に直接関わる文化領域へと踏み込んでいる。この言葉から戦前の「日本精神」を連想するのは過剰反応と思う一方で、かといって全く無関係と言いかれるかどうかは、この言葉が受け手によってどのように解釈されるのかによるだろう。今の日本には「日本精神」を許容する危うさがあるようになってならない。

あるいは次のよくな徳の「伝統」という言葉の使い方にもレイシズムが隠されている。

「現在の世界の水問題は、大変厳しい状況にあります。その解決は、世界の喫緊の課題であり、国際社会が一致して、強固な連携を図りつつ、ことに当たることの重要さは今更言うまでもありません。しかし、その解決策は、その地方、その河川流域ごとに異なるはずです。その地域の先人達が、場合によっては数十年の歴史をかけて、當々として築きあげてきた流れにそつて構築されるべきものであります。それぞれの地域の歴史の流れと伝統が尊重されなければ、本当に地域に役立つものとはならないはずです。（第4回世界水フォーラム全体会員会基調講演・宮内庁ウエップより）」

ここでは、ある地域に数十年の単位で生活してきた人々による「伝統」に注目している。言いかえれば、その地域に新たに居住するようになつた人々を言

外に伝統から逸脱する人々であり、水問題の解決の主体になりえないかのようないい象を人々に与えている。天皇や皇室が繰り返し口にする「お言葉」は、ほとんどの「日本人」にとって違和感のない、むしろ退屈ですらある「常識」の類が多いことが多い。しかし、こうした日本の「伝統」や「文化」の説がレイシズムを支える大衆意識の基層を構成してきた。

●グローバル化する極右と天皇制

冷戦終結以降、世界規模で自立した政治的な動きは、民衆の反グローバリゼーション運動が明確なオルタナティブを社会主義として掲げなくなるなかで、新自由主義グローバリゼーションを左翼とはある意味で真逆のベクトルで批判する極右の台頭である。明らかに左翼の衰退の隙をついて極右が政治的影響力を強めてきているのだ。

極右は、経済のグローバリゼーションを「マクドナルド化」にみられるような画一的な消費文化、格差、貧困、移民の流入による「ミユーニティ固有の価値の破壊として批判し、テロリズムや法制度を通じた移民排斥を実現しようとする。人々は自分が生まれ育った場所で、その場所の文化や伝統を重んじながら暮すことが最も幸福なありかだだし、市場競争よりも、文化や伝統に依拠した民族的アイデンティティの再構築を通じたコミュニティの再建を主張する。近代科学技術を環境破壊の元凶とみなして伝統文化のなかに解決を探そうとする。リベラリストと民主主義を敵視し、家父長制家族制や権威主義を肯定する。米国の福音主義がある一方で、ヨーロッパの極右の一部には近代世界に加担したキリスト教を否定し、キリスト以前へのヨーロッパの古層への回帰、ヨーロッパの原型を北欧やアラブ、インドなど非西歐文化や宗教に求める異教主義的な傾向もある。

「文化」が伝統主義や極右の政治運動と結びついて運動の駆動力として復興しつつあるとき、日本では、裕仁から明仁への代替わりが重なった。グローバルな極右の台頭のなかで、象徴天皇制が世界各地の資本主義延命の文化運動シンクロロシはじめていることに注目したい。天皇制の構造は、見掛けと違つて日本に固有とはいえない側面がある。神話や伝統への回帰を武器にするレイシズムと闘う世界の運動と日本の反天皇制運動とが共通の課題を見出すことは難しくなくなっている。むしろ連帯の可能性が拡がっている。このことは、伝統主義と闘つ左翼の運動にとって大きな希望だと思う。

太田四國の夢は夜ひらく 116

みたび

ひたひたと社会に浸透する「いかがわしさ」

昨一〇一九年五月、アイヌ施策推進法（以下、アイヌ新法）が施行された。内閣官房アイヌ総合政策室は、それに伴う基本方針案に関わるパブリックコメント（意見公募）を昨夏行なった。北海道新聞は情報公開請求を行なって、寄せられた意見の内容を調べようとしたが、六三〇五件の意見のうち98%は公表しないとの回答を得たといふ。理由は、それらのコメントが基本方針案に言及せず、「アイヌ民族は存在しない」「アイヌ民族は先住民族ではない」「アイヌ民族への差別はなかった」などの「差別的で」「法の趣旨に反する」意見で占められていたためであるといつ（一月一八日付け北海道新聞朝刊）。昨年の国会審議において、同政策室は「民族としてのアイヌ民族はいない」とする発言はヘイトスピーチ（差別煽動表現）に当たるとの見解を示しており、それに沿つた方針のようだ。

アイヌ新法では、土地の権利やサケの捕獲などの先住権の保障が明記されていない。この点に関しては、十勝管内浦幌町の浦幌アイヌ協会が、先住権の確認を求める訴訟を今春四月にも起こそうとしており、それをも契機にしてさらに議論が深められる必要性があるだろう。ここでは、昨今のさまざまと言動から判断するなら、総体としてはおよそ信頼に値しない「内閣官房」ですから公開を憚る「メントが

なぜかくも多数寄せられたのかという問題を考えたい。それは、もちろん、六〇〇〇人有余の個々人の主体性に基づく行為というよりは、意見公募への参加を促す呼びかけがネット上で行われたからであろう。事実、私が調べた限りでも、特定の数人ほどの人物が意見提出の呼びかけを熱心に行なっている。それは、私たちの「運動圏」でも行われていることである。そのこと自体が問題なのではない。そこから、どんな意見が寄せられているかが、問題の核心である。歴史的な事実をどう踏まえているか、人権尊重の観点が貫かれているかなどが、その意見の当否の判断基準となるだら。

ネット上で検索できる範囲でその典型的な意見の例を挙げてみる——「偽アイヌ」「成りすましアイヌ」に対する「野放団なバラマキ」を止めよ／「北朝鮮や中国、ロシアにもアイヌの子孫は存在し」ているので、同民族の先住民族性を認める「北朝鮮や中国が北海道を子孫の土地だと主張する口実を作れる」から、アイヌを先住民族として認める法整備を止めよ／「アイヌ協会の幹部には、北朝鮮の基本理念であるチュチエ（主体）思想研究会と深い繋がりを持つ人物がいる」から、へたな権限をアイヌ民族に与えるなetc.——

この種の意見には既視感がある。排外主義的な「日

本单一民族国家論」に基づいて、特定の民族に対する憎悪を煽るそれである。彼ら／彼女らからすれば、七年以上も持続している現政権は、民族・国家論において同一陣営に属するはずなのに、アイヌ民族が制定したことへの疑惑と批判があるのだろう。アイヌ民族運動の背後に潜むチユチエ思想云々の箇所などは、本来ならば噴飯物の言い草に過ぎない。だが、一九九〇年前後以降、劣化するばかりの保守・右翼言論が広く社会に浸透したがゆえに現在の政治・思想状況があると思えば、どんな珍妙な考え方も軽視すべきではない。そう言わざるを得ないほどに、社会状況のいかがわしさは極点に達している。



相模原市の障害者施設・津久井やまゆり園の殺傷事件を引き起こした被告が「障害者は家族や周囲に迷惑をかけている」という考え方を内面で固めたのは、米大統領選に立候補したトランプの言動を聞いてからだという（一月一七日付け朝日新聞夕刊「取材考証」および「八日付け同紙朝刊」）。「不法移民の入国を阻止」するために対メキシコ国境に壁を作るなどの排外主義的なトランプ発言に、社会の底流に存在していながらタブー視されていること公然とは口にできないことを、よくぞ言ってくれたとの思いを抱いたのだろう。被告は事件の五ヵ月前に衆院議長に宛てた手紙で「障害者四七〇人の殺害予告」をしているが、この計画を「ぜひ、安倍晋三様のお耳に伝えること」を望んでいた。被告は日米のふたりの政治家に、身勝手で一方的な思い入れをしたのだろうか。〈いかがわしさ〉には伝播力が備わっていて、知らずして互いに惹き合つ／惹かれ合つのだらうか。

重臣リベラリスト 南原繁の一九五六年「紀元節」演説を読む
——〈壊憲天皇制・象徴天皇教国家〉批判 その8

天野恵一



天皇「代替わり」の政治プロセスの「2・11」がまた近づいている。今年の私たちの「実行委」の名称は「代替わり」に露出した『天皇神話』を撃つ! 2・11反『紀元節』行動だ。

敗戦と占領で、國家レベルでは消滅に追い込まれた「紀元節」セレモニーが東京大学とじうレベルでは残っていたという事実。それは敗戦の年(一九四五年)東大総長となつた南原繁の総長演説が残されているので確認できる。私は、その南原の『新装版文化と国家』(初版一九五七年・新装版二〇〇七年(東京大学出版))をキチンと読みなおす作業をしてみた。あの「天皇の侵略戦争・植民地支配」への思想的反省がどういうかたちでなされたのかを具体的に確認してみるとために。もちろん「新日本文化の創造――紀元節における演説」(一九四六年一月一一日)なるものが存在していること自体が、まつとうな反省の不在を示しているといふ判断を前提に。

ただ、東大法学院の責任者であった南原は、天皇機関説の美濃部達吉について、「神がかり天皇主義右翼クループ」からねらわれ続けた「リベラル」な政治学者であることは、よく知られている。だから敗戦後、占領下にふさわしい総長ということだったのだろう。

「そもそもわれわれの祖先は、わが民族を永遠の昔より皇室を国祖と仰ぎ、永遠に生き来つたものと信じ、最近までさように教えられて來たのである。それは必ずしも伝うる」とく、今日が二千六百年で

はないかも知れぬ。果してどこまでが歴史の眞実であって、どこまでが神話と物語であるかは、実証的历史学や比較文学の研究にまつべき事柄であつて、この方面において我が国の歴史は今後徹底した批判的研究が遂げられなければならない。しかし、たといその結果がどうであろうとも、われわれの問題は、それらの神話や歴史に盛られた意味、いわば民族の世界観的意味内容である。重要なのは、われわれの祖先の抱いた理想――当時の自覚していた文化階級が自己の民族の永遠性を信じ、その天的使命を意識し来つたという点である。いやしくも民族の発展を庶幾(こいねが)い、世界に貢献せんと欲するほどの中じめな国民にして、自己の精神史的使命と悠久の生命を理想とし、そのための努力をしない國民があるだろうか(傍線引用者)。

南原は、史実と神話を区別すべきで、神話を事実のように語る非科学(実証)的態度は、決定的にしりぞけている。しかし、政治的神話(彼が「一種の選民思想と誇大妄想」として非難している)に流れれる、皇室を中心にはまとまつた、民族の「理想」と精神的活力を超歴史的に実体化し、肯定的に評価することに躊躇はない。露骨な排外主義というその内容を拒否しているだけなのだ。一九四六年の元旦の詔書(いわゆる「人間宣言」)については、「うだ。

「……本年初頭の詔書はすぐる重大な歴史的意義をもつものといわなければならぬ。すなわち、天皇は『現人神』としての神格を自ら否定せられ、天

皇と国民の結合の紐帯は、いまや一に人間としての相互の信頼と敬愛である。これは日本神学と神道的教義からの天皇御自身の解放、その独立の宣言である。/それは同時に、わが国文化とわが国民の新たな「世界性」への解放と称しえるであろう。なぜならば、ここで初めて、わが国の文化がわれに特殊な民族宗教的束縛を脱して、広く世界に理解されるべき人文主義的普遍の基礎を確然と取得したのであり、国民は国民たると同時に世界市民として自らを形成しえる根拠を、ほかならぬ詔書によって裏づけられたのである」(傍線引用者)。

「臣民」の「國際市民」への転換がなんと身分制秩序のトップ天皇(王)の「詔書」によって根拠づけられた、というのだ。なんという政治的倒錯。

南原の敗戦直後の他の発言に目をやれば、彼が平和天皇の「御聖断」が人々を救つたといつ、支配者がたれ流し続けている「戦後神話」のいち早い語り部であったこと、彼のいう「人間=人権」の尊崇が、「君民共治」(天皇と国民の一体化)がデモクラシーであるとするための媒介の論理以上のものでないことが、ハッキリと読みとれる。

「重臣リベラリスト」(日英同盟)をテコに先進帝国主義諸国と組んでいくことを目指した天皇をとりまいた重臣たちのリベラリストの戦後への延命。象徴天皇制デモクラシー(君民一体)イデオロギーへ、今、戦後民主派の少なからぬインテリが君主(天皇)に対峙するデモクラシーという立場を投げ捨て、合流しだしている。今おきているその支配的な流れは、大日本帝国憲法(神權天皇制)への回帰ではなく、南原ら戦後民主主義者があらためてつくりだした「重臣リベラリスト」への合流である。

一野次思日誌

1月1日～1月31日

- [1月1日]** 天皇、皇族◆徳仁、雅子が皇族や三権の長から新年の「祝い」を受ける「新年祝賀の儀」が皇居・宮殿で開かれる。徳仁◆即位関連行事を無事に終えたとして安堵を示すとともに、前年は国内外の多くの人々と会い、温かい祝福を受けたと振り返った。
- [1月2日]** 天皇、皇族◆新年恒例の一般参賀が皇居で行われ、徳仁が雅子や明仁、美智子、秋篠宮、紀子ら皇族と宮殿・長和殿に立ちあいさつ。約6万8千人が訪れた。
- [1月3日]** 悠仁◆宮内庁が、悠仁が作った新春の盆栽「春飾り」の写真を初めて公開。
- [1月4日]** 德仁、秋篠宮◆安倍晋三首相や閣僚、副大臣らを皇居・宮殿の小食堂「連翠」に招き、昼食会を催す。秋篠宮が同席。宮中昼食会◆安倍晋三首相が、皇居で行わられた宮中昼食会に出席。
- [1月5日]** 天皇、皇族◆徳仁、雅子が、年頭に当たり皇居・宮殿「松の間」で「講書始の儀」に臨む。秋篠宮、紀子ら他の皇族も出席。
- [1月6日]** 「帰国の記帳」◆安倍晋三首相が、中東3カ国歴訪を終え、皇居で「帰国の記帳」。
- [1月7日]** 天皇、皇族◆新春恒例の「歌会始の儀」が皇居・宮殿「松の間」で開かれ、徳仁、雅子や皇族が皇族や三権の長から新年の「祝い」を受ける「新年祝賀の儀」が皇居・宮殿で開かれる。
- [1月8日]** 秋篠宮、紀子◆阪神大震災25年の追悼式典に出席するため兵庫県入り、防災科学技術研究所兵庫耐震工学研究センター（同県三木市）を視察。
- [1月9日]** 天皇、皇族◆宮内庁が、天皇一家と明仁、美智子がそれぞれの住まいに黙とうしたと明らかに。
- [1月10日]** 秋篠宮、紀子◆神戸市中央区の兵庫県公館を訪れ、「1・17のつどい」阪神大震災25年追悼式典に出席しあいさつ。
- [1月11日]** 上皇侍従◆福島県警捜査2課長の山田樹が上皇侍従に就く宮内庁人事が公表される。
- [1月12日]** 天皇一家◆東京都千代田区の有楽町朝日ホールを訪れ、「ギャツツ」のチャリティー試写会に出席。
- [1月13日]** 天皇一家◆東京都文京区の東京ドームを訪れる。佳子◆東京都文京区の東京ドームを訪れる。
- [1月14日]** 天皇、皇族◆徳仁、雅子が、年頭に当たり皇居・宮殿「松の間」で「講書始の儀」に臨む。秋篠宮、紀子ら他の皇族も出席。
- [1月15日]** 「帰国の記帳」◆安倍晋三首相が、中東3カ国歴訪を終え、皇居で「帰国の記帳」。
- [1月16日]** 天皇、皇族◆新春恒例の「歌会始の儀」が皇居・宮殿「松の間」で開かれ、徳仁、雅子や皇族が皇族や三権の長から新年の「祝い」を受ける「新年祝賀の儀」が皇居・宮殿で開かれる。
- [1月17日]** 天皇、皇族◆宮内庁が、悠仁二郎が依願退職する宮内庁人事が公表される。
- [1月18日]** 上皇侍従◆福島県警捜査2課長の山田樹が上皇侍従に就く宮内庁人事が公表される。
- [1月19日]** 德仁、雅子◆埼玉県所沢市の国立障害者リハビリテーションセンターを訪れ、入所者らの職業訓練を視察。同センターと併設する国立職業リハビリテーションセンターの創立40周年の記念式典に出席。
- [1月20日]** 天皇一家◆東京都千代田区の有楽町朝日ホールを訪れ、「ギャツツ」のチャリティー試写会に出席。
- [1月21日]** 天皇一家◆東京都文京区の東京ドームを訪れる。佳子◆東京都文京区の東京ドームを訪れる。
- [1月22日]** 德仁、雅子◆埼玉県所沢市の国立障害者リハビリテーションセンターを訪れ、入所者らの職業訓練を視察。同センターと併設する国立職業リハビリテーションセンターの創立40周年の記念式典に出席。
- [1月23日]** 天皇一家◆東京都文京区の東京ドームを訪れる。佳子◆東京都文京区の東京ドームを訪れる。
- [1月24日]** 天皇誕生日◆宮内庁が、2月23日の天皇誕生日に皇居・宮殿で実施する一般参賀の要領を発表。
- [1月25日]** 德仁◆第201通常国会が「召集」され、参院本会議場で行われた開会式で、徳仁が「お言葉」述べる。
- [1月26日]** 天皇、皇族◆徳仁、雅子が、年頭に当たり皇居・宮殿「松の間」で「講書始の儀」に臨む。秋篠宮、紀子ら他の皇族も出席。
- [1月27日]** 悠仁◆宮内庁が、悠仁二郎が依願退職する宮内庁人事が公表される。
- [1月28日]** 秋篠宮、紀子◆前年浸水被害に遭った福島県伊達市を「私的」に訪問。
- [1月29日]** 上皇嗣の礼◆宮内庁が、天皇代替わりに伴う儀式や祭祀の細部を詰める「大礼委員会」の第9回会合を開く。
- [1月30日]** 明仁◆宮内庁が、明仁が29日夕、皇居・吹上仙洞御所で一時意識を失つて倒れたと発表。
- [1月31日]** 秋篠宮◆福岡市東区の水族館「マリンワールド海の中道」を訪れ、視察。
- [1月32日]** 佳子◆東京・池袋のサンシャインシティ文化会館を訪れ、「第69回関東東海花の展覧会」を鑑賞。
- 客」と食事を共にする「饗宴の儀」の回数や招待者数を削減、立食形式も導入し、簡素化したと報道。
- [1月25日]** 德仁、雅子、愛子◆東京都墨田区の両国国技館を訪れ、大相撲初場所の取組を観戦。
- [1月26日]** 德仁、雅子、愛子◆東京都墨田区の両国国技館を訪れ、大相撲初場所の取組を観戦。
- 業などの分野で優れた業績を上げた農林水産祭の天皇杯受賞者7組14人と面会。
- [1月27日]** 德仁、雅子、愛子◆東京都墨田区の両国国技館を訪れ、大相撲初場所の取組を観戦。
- 業などの分野で優れた業績を上げた農林水産祭の天皇杯受賞者7組14人と面会。
- [1月28日]** 德仁、雅子、愛子◆東京都墨田区の両国国技館を訪れ、大相撲初場所の取組を観戦。
- 業などの分野で優れた業績を上げた農林水産祭の天皇杯受賞者7組14人と面会。
- [1月29日]** 德仁、雅子、愛子◆東京都墨田区の両国国技館を訪れ、大相撲初場所の取組を観戦。
- 業などの分野で優れた業績を上げた農林水産祭の天皇杯受賞者7組14人と面会。
- [1月30日]** 德仁、雅子、愛子◆東京都墨田区の両国国技館を離れ、大相撲初場所の取組を観戦。
- 業などの分野で優れた業績を上げた農林水産祭の天皇杯受賞者7組14人と面会。
- [1月31日]** 德仁、雅子、愛子◆東京都墨田区の両国国技館を離れ、大相撲初場所の取組を観戦。
- 業などの分野で優れた業績を上げた農林水産祭の天皇杯受賞者7組14人と面会。

革命の「眞実」

年末年始香港に行つてきました

この年末年始、香港に行つてきました。直接的な目的は、一年ほど関わってきた香港人抗議弾圧に関連して、送還された二人の被告人（郭紹傑さんと嚴敏華さん）に会い、現地で報告会を持つためである。弁護士と支援者八人でツアーチームを組んだ。もちろん、現在進行形で大きく動いている香港の運動の現実を、一目見たいという気持ちも強かった。私たち「靖國抗議見せしめ弾圧を許さない会」（見せしめQ）は、「人を救援するための組織で、現在の香港の運動についての見方や評価はさまざまある。しかし郭さん・嚴さん、そしてかれらの友人たちも現在の運動には積極的に関わっており、連日、運動関係者と顔を合わせる機会に恵まれた。

一二月二七日の早朝、香港に着いた私たちは、午後、郭さん・嚴さん、二人の家族たち、そしてかれらの運動仲間と一緒に、この春から始まる控訴審に向けての相談会をもつた。私も二人には束拘での面会と判決公判以来だから、握手したりハグしたりするのはもちろん初めて。翌二八日には、旺角（モンコック）の香港教育専業人員協会で、見せしめQ主催の裁判報告集会。香港側からは「維護二戦史実聯席會議」の何俊仁さん、香港城市大学名誉教授の鄭宇碩さんが発言。

見せしめQからは裁判報告を一瀬敬一郎弁護士、救援会の活動報告を私が行つた。そして郭さんと嚴さんが並び立ち、控訴審に向けた決意表明。

翌日からはフィールドワークである。二九日は、嚴さんの案内で新界地区にある馬寶寶（マーポーポー）農場を参観。

東北開発反対運動の拠点の一つで、農村地帯のすぐ間に林立する高層ビルが迫っている。都市社会香港における農と食のありかたを有機農業を通じて提起している。どちらになつた野菜中心のお昼ごはんもおいしかったが、今年の夏には強制撤去されようとしているとのこと。

夜は郭さんの家族・友人ととの会食。この間の大規模デモを呼びかけている「民間人権陣線」の中心メンバーの顔も見えた。

三〇日は、見せしめQの仲間でジャーナリストの和仁廉夫さんの案内で、日本

の香港軍政史跡をめぐるツアー。私は別

行動で、香港中文大学の政治学の先生に

会い、雨傘運動以来の市民的不服従の運

動について話を聞き、別称「暴徒大学」

のキヤンバスを案内してもらつた。夜は、

この間の運動にも深く「ミットしている

古い友人に会つて話を聞く。

三一日はマカオ。夜に戻つてみると、

ホテルのある沙田（シャーティン）の駅

前にあるショッピングセンター前の広場

に、五〇〇名ほどの若者たちが集まつて

いる。その周りは多くの市民たち。新年のカウントダウンだ。「光復香港、時代革

命」、警察を批判するスローガンが延々と

叫ばれる。二二時が近づくと、一斉に携

周辺の銅鑼湾（トンローワン）一帯が、

すでにデモ参加者で埋めつくされてい

る。街のあちこちに各団体のベースが出

て、宣伝活動をおこなつていて。デモは、

参加者五〇万との発表。普段はトラムが

走る八車線はある大通りが開放され人で

埋まる。私たちは先頭に近いほうにいた

が、一時間ほど歩いて解散地点につくと、

涙弾も発射されたという。この時点でも

まだ、出発地点の公園は、たくさんの人

が残つていたそうだ。結局、夜にかけて

五〇〇名ほどが拘束され、その半数以上

が逮捕されたと後で知つた。

滞在時間も会つた人もさく限られては

いたが、今回見聞きしたことは大きかつた。報道などに基づいてイメージしてい

た香港の運動や街の様子ともすいぶん

違つていて。当然のことだが、事態は流動し続けていた。その社会にいる人たち

が、いまそこで暮らしながら歴史に参与

しているのだ。そのダイナミズムの一端には、ふれる感じができた気がしている。

（見せしめQ／新季一）

た2020東京五輪。私たちにとつては返上までのカウントダウンだ。とうわけで、年明けから全力疾走のおことわりング。一月には一回の集会と一回の街頭アピールをやつた。

五月二四日、スポーツジャーナリスト谷口源太郎さんの新著「オリンピックの終わりの始まり」の出版記念の集いを開催。谷口さんは、本に沿いながら、まずは戦後のオリンピックがいかに政治・金 amoreだったかを検証し、後半は政府の「復興五輪」というスタンスが被災者を踏みにじる政治的プロパガンダだということを語つてくれた。

毎月二四日の反五輪デー。一月二四日はお台場で東京都主催半年前イベント開催。谷口さんは、本に沿いながら、まずまだ、出発地点の公園は、たくさんの人達が残つていたそうだ。結局、夜にかけて五〇〇名ほどが拘束され、その半数以上が逮捕されたと後で知つた。

滞在時間も会つた人もさく限られてはいたが、今回見聞きしたことは大きかつた。報道などに基づいてイメージしていく。その社会にいる人たちが、いまそこで暮らしながら歴史に参与しているのだ。そのダイナミズムの一端には、ふれる感じができた気がしている。



五月二四日は「五輪返上・お」とわリンク走る！

開会（2020.7.24）まで半年を切つ

会場の超高級ヒルトンホテルからは三億円かけたといつりソーランジングス（五輪マーク）が真正面に見え、ライトアップ点灯と打ち上げ花火が式典のメイン。私たちは見物客がてんこ盛りに集まつた二階オーブンテラスのど真ん中で「東京五輪反対！」の巨大プラскуюを掲げコール。唇間、福島の仲間も郡山でスタンディング。その様子や福島からの報告を電話で繋いだ。反五輪の会の仲間たちはバナーを掲げ、ホテル正面前から抗議のアピール。TVニュースでは「オリンピック止めろー！」の反五輪の会の「コールがしっかり聞こえたよ！やつたー！」ヶ所に分かれた行動

【学習会報告】

思索者21 「天皇と神道の政治」
(花伝社、一〇一九年)

本書は「思索者21」というグループによる共同研究の成果ということだが、これは法学者である土屋英雄筑波大学名誉教授を中心とする研究会のようだ。

安倍政権などによる天皇利用による復古、それに対して護憲の立場から危惧する天皇という図式は、もはやありふれた道具立てである。本書の立場も明らかにそうで、いちいち引っかかる点が多く、楽しい読書ではなかつた。ただ、それ以外の部分については、国家神道の歴史についても政教分離や主権在民原則についても、オーソドックスともいえる整理が

[學習會報告]

思索者21 「天皇と神道の政治利用」 明治以降の天皇
(花伝社、一〇一九年)

続く。そのほとんどは整理にとどまり、著者たちの主張が前面に出しているとはいえない（学生のレポートを読んでいたうだとうつ感想もあった）が、その点だけは「使える」部分はある。

政治権力と天皇との関係の説明は、明治維新以来の「天皇を利用の道具」と見るのは長州系の「伝統」という、かなり雑な根拠によっている（安倍も長州系であるとか）。明治維新で、討幕派が天皇を玉として使ったというのはその通りだろう。「制度としての政治利用」が構造化されたのが近代天皇制であるといいたい

識されてもいいのではないか。
本書の主張でいえば、象徴天皇制とは、天皇の政治利用の余地を断つものとなるべきことにならう。しかし、天皇の行為を「内閣の助言」と承認で縛つたことが、逆に天皇の政治利用の回路を保持することになったと整理され、天皇の「代替わり儀式」が登場に基づいて行われたのも、神権政治への復古を図る政治による天皇の利用だという。それだけでなく、生前退位をめぐる天皇の発言は、憲法を擁護し、尊重するものであつて憲法九九条に

るに至つては、もうねじれ切つてゐる
といふ感想しかもてない。

書名にある「天皇」と「神道」とい
う近代国家の統合装置のありようは、
それぞれ位相も異つていよう。そのそ
れぞれが近代国民国家においてどのよ
うに機能してきた（きている）のかと
いうことは、具体的に問われるべきで
ある。「政治利用」を出発において、
結論的にそのことを確認しているだけ
ではすまないのでないか。

* 次回は遠藤正敬の『天皇と戸籍』を
一月一八日に読む。
(北野薦)

利用 明治以降の天皇制の根源的問題

ながら、そうであれば誰もしない。だが、國家の外にある操作可能な存在は、国家の外にある操作可能な道具とはもはや別物であることが理解される。

則つた行為である、自民黨の憲法草案で天皇の憲法尊重義務を外したのは、そういう形で天皇が憲法に加担することを阻止するためではないかと推測す

会場の超高級ビルトンホーテルからは三億円かけたというロゴングス（五輪マーク）が真正面に見え、ライトアップ点灯と打ち上げ花火が式典のメイン。私たちは見物客がてんこ盛りに集まつた二階オーブンテラスのど真ん中で「東京五輪反対！」の巨大プラカードを掲げコール。昼間、福島の仲間も郡山でスタンディング。その様子や福島からの報告を電話で繋いだ。反五輪の会の仲間たちはバナーを掲げ、ホテル正面前から抗議のアピール。TVニュースでは「オリンピック止めろ！」の反五輪の会のコールがしつかり聞こえたよ！ やつたー！ 二ヶ所に分かれた行動

翌二五日はLA報告会。昨年七月五輪開催一年前イベントに来日したZolympics LAの仲間たちと一月、訪米した仲間が再会。一九三〇、一九八四年に続き二〇一八年に三回目の五輪開催を目論むLAで、五輪や開発や排除に反対する人々の運動に参加・交流した井谷聰子さん、いちむらみさとさんの話を聞いた。五輪でコミュニケーションが破壊されるのはどうこも同じだ。前日の映像を最初に見て、続いてLAのみなさんのパワフルな活動にエンパワメントされ、国際連帯の重要

護衛艦「たかなみ」の中東派遣
反対現地集会・デモ

さを再確認しながら走り続けた。護衛艦「たかはし」は、反対現地集会に参加する連中の乗組員たちが、船の甲板で手旗を振る。彼らは、この行動が、日本の民主主義の象徴であることを示すものだと信じていた。しかし、一方で、彼らは、この行動が、日本の歴史に対する尊重を示すものだと信じていた。彼らは、この行動が、日本の歴史に対する尊重を示すものだと信じていた。

かたに。本番まで五ヶ月半、み
るべく、
のひととわリンク／京極紀子
和船団が出港して長浦港に
地所属の掃海母艦「ぶんじ
軍が一〇月下旬からバ
域で実施した「国際海上訓
巨大な旭日旗を艦橋に掲
ノ湾内での艦隊航行訓練の
ので、いけば、象徴天皇制と
治利用の余地を断つもの
国家の外にある操作可能
はや別物であることが意
いのではなか。

先頭に立つた艦艇で、機雷を最大二三発搭載・敷設する能力をもつた機雷敷艦である。比与宇地区に建設中のSM3ブロックIIA用の新しい弾薬庫はすでに建設が終わり、土をかける作業が進んでいる。新たな自衛艦隊司令部＝海上戦センターもほぼ完成し、ここに勤務する自衛官の官舎も建設が進んでいる。浦港はいま大きく姿を変え、ほぼ自衛専用の港に変容しつつある。民間施設横浜DNAベースターズの練習場（日本海軍軍需部庁舎跡、戦後大洋漁業にい下げられた）も、来年度予算で防衛が買い取り、後方支援施設を建設するといふ感想しかもてない。

書名にある「天皇」と「神道」という近代国家の統合装置のありようは、それぞれ位相も異つていよう。そのそれぞれが近代国民国家においてどのように機能してきた（きている）のかと、いうことは、具体的に問われるべきである。「政治利用」を出発において、結論的にそのことを確認しているだけではすまないのでないか。

* 次回は遠藤正敬の『天皇と戸籍』を
一月一八日に読む。
(北野晉)

